

ブタはどのようにして現金になりうるのか? パプアニューギニア高地辺縁部における生業生態と貨幣経済

How Are Pigs Exchanged for Cash?

小谷真吾

はじめに

①ボサビ

②ボサビにおけるブタ飼育

③生業の変化と貨幣経済の受容

④現金とブタ

⑤ブタ売買の事例

⑥ブタの消費

⑦ブタ飼育の定量的特徴

⑧貨幣経済とブタ売買に関する考察

【論文要旨】

畑を荒らしたブタは、人々の収入源である。人々は故意に畑の中にブタを放ち、そうしてからブタを屠殺し売却することで現金を得る。これは、パプアニューギニア南部高地州に居住するボサビにおける事例である。この事例は、貨幣経済がどのようにシステムの中に取り込まれていくのか、その過程を表しているのではないか。本論文では、ボサビのブタ飼育をはじめとする生業生態を明らかにし、他集団における環境利用システムと比較することによって、彼らのブタ飼育の特徴を考察した。同時に冒頭の事例の分析によって、近年生態人類学の中で無視できないものになりつつも、その過程の分析がほとんど行なわれてこなかった、生業生態システムへの貨幣経済の浸透について考察を行なうこととした。

その結果、ブタの売買が行なわれた／行なわれなかつた場合の主観的理由を弁別する基準を分析してみると、ブタが自分の共同体に属していない／いるという基準が設定できた。「畑を荒らした」、あるいは「野生化した」という操作がなされて、ブタは共同体外の存在に分類される。そこには、食物交換に関する呪術的信仰が強力な彼らの社会において、飼いブタがその所有者によって消費されることを忌避する規範が背景に存在する。そうまでしてブタの売買を行なう理由を考えてみると、他に売買に値する事物がボサビに存在しないことが挙げられる。それは、他に余剰生産物がないことと同時に、貨幣経済の浸透する以前からブタが交換財として使用されてきたことにもよると考えられる。一方で、ブタの交換財としての使用は近年盛んになったと考えられ、それは貨幣経済の浸透、外部からの影響の増大と同期している。貨幣経済の浸透とブタの売買は、ポジティブ・フィードバックの関係を持ってそれぞれの受容を加速していくと考えられるのである。